ワオーレスの人魚

岩井俊二

オーレスの人魚

岩井俊二

角川書店

ウォーレスの人魚

平成九年九月二十五日　初版発行
平成九年十月二十八日　第二刷発行

著　者――岩井俊二
発行者――角川歴彦
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二-一三-三
〒102　振替　〇〇一三〇-九-一九五二〇八
電話／営業部　〇三-三二三八-八五二一
編集部　〇三-五二二九-三五八八
印刷所――旭印刷株式会社
製本所――株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本は小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
©Shunji Iwai 1997.
ISBN4-04-873058-4　C0093

ウォーレスの人魚　目次

序章 片鱗 7

第一章 海人 19

セント・マリア・アイランド
ユーリファリンクス
ローレライ現象
遭遇
ヴォイス・ゾーン
海人
捕獲
人間たちの罪

第二章 眷属 163

海の孤独
プロフィール
逗子
ホモ・アクアリウス
マーム・エイド

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三章 鱗女 259

水の呼び声
香港夜
音の魔術
水の記憶
水の子供
水の言葉
水の法則
水の羅針盤
水の契り
水の時計
宿命

終章 人魚 375

身体の中の海
冬眠
極海
氷の墓
人間と人魚
海に還る

あとがき 459

【登場人物】

ビリー・ハンプソン……「ネイチャー・パラダイス」誌の記者
ライアン・ノリス……イルカの言語研究を専門とする海洋生物学者
ゴードン・ペック……ライアンの海洋研究所の助手
羽陸洋……同じく海洋研究所の助手
ジャック・モーガン……海洋研究所のエンジニア
ジェシー・ノリス……ライアンの一人娘
アルバータ・ノリス……ライアンの妻
海原密……東京の大学に通う学生
手塚……フロリダ州立病院の医師
リック・ケレンズ……世界的な進化学の権威・キーウエスト海洋科学研究所の所長
斎門斉一……遺伝子工学の世界的研究者・播磨工科大学の博士
天野犀子……斎門の助手
海洲全……香港の実業家
海洲化……洲全の息子
海鱗女……洲化の妻
海洲慶……洲化の弟
A・R・ウォーレス……イギリスの博物学者・進化論者

ウォーレスの人魚

装幀／岩井俊二
デザイン／冨永浩一
カバー・口絵装画／伊藤太一（A・T-Illusion）

序章　片鱗――十九世紀　香港

イギリスの博物学者チャールズ・ダーウィン（一八〇九―一八八二）は他でもない『種の起源』の著者であり、不世出の進化論者であった。艦長フィッツ・ロイ率いる海軍測量艦ビーグル号に乗船して世界一周の航海に出たのは彼が三十一歳の時であった。この航海によってダーウィンが進化論の着想に目醒めたのはあまりにも有名である。

しかし『種の起源』それ自体が進化論の始まりというわけではなかった。

フランスのジャン・バプティスト・ド・ラマルク（一七四四―一八二九）はダーウィンにも多大な影響を与えた進化論者であった。チャールズの祖父エラスムス・ダーウィンも進化論の草分け的存在であり、ラマルクよりも更に以前に進化論に関わる本を出版している。しかし当時の進化論は、生物が神により創造され常に不変であるとする当時のキリスト教的世界観と真っ向から対立するものであり、進化論者たちには過酷な運命が待ち受けていた。ラマルクは激しい批判の中、晩年は貧困と失明に苦しみ、二人の娘に助けられながら自説を主張し続けた。ロンドン大学のロバート・グラント教授はラマルキズムを公に支持したばかりに、大学から追放され、貧困のうちにこの世を去った。ロバート・チェンバースは一八四四年に「創造の痕跡」という本を匿名で出版し進化論を擁護したが、ロンドン市民にはそれを大目に見る寛容さはなかった。チャールズの祖父エラスムスにしても危険思想者とみなされ、彼の子孫たちでさえ祖父の書物を黙殺していたぐらいである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ビーグル号による航海以降、ダーウィンの中で進化論は日増しに成長を続けていた。

一八四四年に『種の起源』の草稿を完成させ、一八五四年には本格的な執筆に取りかかっていたが、全ては極秘に進められ、本人の中では公表に踏み切る勇気を持ち得ずにいた。本人が友人宛の手紙で語っているとおり、進化論を公にすることは「自殺するようなもの」だったのである。そんな彼が『種の起源』を出版せざるを得なくなるようなある事件が起きた。

一八五八年六月、ひとつの論文が南の島からダーウィンのもとに届く。

「変種がもとの型から出て無限に離れていく傾向について」という題名を持つその論文の著者はアルフレッド・R・ウォーレス（一八二三―一九一三）。彼は当時マレー諸島で博物学及び、動物地理学の研究をしていた。その論文に目を通したダーウィンは驚愕し、狼狽した。それは彼自身が極秘に進めていた論文とあまりにも酷似していたのである。もちろんウォーレスはダーウィンが進化論について独自の論文を進めていることなど知る由もなかった。

ウォーレスの論文を見てしまったその偶然がまさにダーウィンの運命を変えたのである。

ダーウィンは自著の執筆を中断すると、あわててウォーレスの論文に自分の論文を加えてロンドンのリンネ学会に連名で発表した。さらにその翌年、自著『種の起源』を未完成のまま発表してしまったのである。

進化論の公表を「自殺するようなもの」とまで考えていたダーウィンをしてこのような行為に踏み切らせたのは、この歴史的大発見をウォーレスに奪われまいとしたからに他ならない。ダーウィンも科学者の業には勝てなかったのである。しかし結果的に歴史はダーウィンに味方した。ダーウィンよりも先に論文を完成させていたにもかかわらず、歴史はウォーレスの名をダーウィンと『種の起源』の栄光の陰に隠してしまった。もしウォーレスがダーウィンに自作の論文を送ったりしなければ、歴史は大きく変っていたかも知れない。少なくとも『種の起源』はダーウィン独自の理論ではなく、ウ

ォーレスの論を裏付ける解説書に過ぎなくなっていたに違いない。つまり歴史的発見の名誉はウォーレスに齎され、ダーウィンはその賛同者というポジションに甘んじなければならなかったはずである。

重大なチャンスを逸したウォーレスだったが、本人はダーウィンとの共同論文やその後のダーウィンの『種の起源』出版についてはむしろ好意的な立場を取っていた。二人の共通の発見である自然選択による種の進化の理論をおとなしくダーウィンの功績に帰し、「ダーウィニズム」という名称まで贈ったほどである。

人道的にはともかく、科学者にしてこの態度は奇妙と言う他ないが、そればかりではなくこのアルフレッド・ウォーレスは謎の多い人物でもある。

イギリスの博物学者にして進化論者である彼は、マンモスシャーに生まれた。土地測量や建築業に従事する青春期を経て、教員となった彼は昆虫学者ベーツと知り合い、彼についてアマゾン地方の博物採集を行った。さらにその後モルッカ諸島に旅行し、博物学および動物地理学の研究を行った。かの論文「変種がもとの型から出て無限に離れていく傾向について」を書いたのはその頃である。晩年に入ると何故か心霊術や超能力まがいの研究に凝り、このあたりから彼は学会から黙殺され、その記録は極端に少なくなる。

『香港人魚録』はそんな彼の遺作と伝えられる奇書である。そこにはなんとウォーレスが香港で遭遇したという人魚に関する詳細な報告が記されている。

この書物を手にした当時のロンドン市民がどんな顔をしたかは想像に難くない。世間に黙殺された人物とはいえウォーレスはひとかどの学者である。その人物が長い沈黙の末に発表したのが〝人魚〟である。本書には人魚の写真までが掲載されているが、当時流行していたユニコーンやケンタウルスなど架空動物たちの合成写真と区別がつかなかった。ほとんど乱心とさえ見えるウォーレスのこの書物は、そのあまりの荒唐無稽さに誰もが失笑した。

アルフレッド・R・ウォーレスの名は人名辞典でもひもとけば今でもたやすく見つかるだろう。しかし『香港人魚録』に触れている記述を見つけるのは容易ではない。

以下はその『香港人魚録』の概要である。

一八八四年、地元の漁師が一匹の人魚を捕えた。

漁師はそれをとある雑技団に高額で売りつけた。人魚の噂は香港中に流れ、当然のことながらウォーレスの耳にも入った。もとより件の雑技団には水中人魚舞踊という出し物があり、ガラス張りの水槽の中で少女たちが下半身に人魚のような鱭を巻きつけ、膨らみかけた乳房を貝殻で隠しながら、陳腐な曲芸を披露していた。ウォーレスもそれは心得ていたので、友人の実業家、海洲全（ホイ・ジャウチュン）に誘われた時も、正直さっぱり乗り気ではなかった。しかし熱心な友人の誘いに負けて、殆ど半信半疑でテント小屋に足を運んだのである。

案の定、出し物は相変わらずの人魚舞踊だった。まあこんなものさと、ウォーレスは洲全をたしなめたが、血の気の多い洲全は納得できず、出口にいた呼び込みに金を返せと喰ってかかった。呼び込みの男は本物の人魚をこんな安い入場料で見せる道理がないだろうと居直り、ウォーレスたち二人にこう耳打ちしたのである。

「ホンモノはとっても危険だからね。裏の大樽に厳重に監禁してある。もし見たければ見せて差し上げようか？」

この手口が彼等の常套であることはすぐに見透かせた。こうやって客から破格の見物料をせしめるのである。ウォーレス自身かつてその手口で蛇女なる妖怪を見せられたことがあった。少年時代、両親と共に香港に逗留していた頃のことだ。雑技小屋は父に連れられてしばしば見物に訪れたものだった。半裸で描かれた蛇女の妖艶な看板は子供のウォーレスには恐怖だったが、同時になにか逃れ難い

魅力も禁じ得なかった。ウォーレスを連れた父はその看板の前ばかりはいつも素通りした。ウォーレスとしても父親に裸の看板を指して、観たいとねだる勇気もなくて、とうとうある日、ひとりで雑技団に出かけたのだった。

蛇と人間の間に生まれた蛇女は四川省（セイチュンサーン）の竹林（ヂョツリム）で発見されたという生い立ちだった。ところが実際は両腕と片足のない全裸の少女が全身に下手な筆で鱗を描きなぐられて、ムシロの上を転がってみせるだけという実に劣悪な出し物だった。しかも少女は生来の畸型ではなかった。かつてその少女が違う出し物に出ていたことをウォーレスは憶えていた。少女は綱渡りの類の芸を披露していた。さしずめ綱から足を踏み外し、使い物にならなくなったため、両手と片足を切り捨てられ、蛇女に転業させられたのであろう。しかしそんな胸糞の悪い話は九龍（ガウロン）あたりの雑技小屋では日常茶飯事だった。

「さあ、いかがかな？　南支那海で捕れた正真正銘本物の人魚ですぜ」

呼び込みの勧誘はしつこかった。

「そんなもの見たくもない！」

洲全はにべもなかったが、そんな彼にまあ、折角だから見て帰ろうではないかと誘ったのはウォーレスの方だった。その時のことをウォーレスはこう述懐している。

「その時私には既に人魚の歌が聴こえていたのかも知れない。その歌は私に助けてくれと呼びかけていた。私はいつか見た蛇女の少女を想い出していた。不思議なことにその面影は少年時代に見た時と少しも変わらぬ鮮明さで私の脳裏に蘇っていた……」

ウォーレスたちは呼び込みに如何にもいかがわしげなテントに案内された。テントからひとりの客が飛び出して来て、ウォーレスたちに凄い、あれは本物だとわめきたて、呼び込みにもう一度見せてくれと無心した。呼び込みはその客に法外な見物料を吹っかけ、客は諦めて帰って行った。いかにも芝居がかったその光景に洲全は眉をひそめてつぶやいた。

「ありゃサクラだぜ」
案内された小屋は薄暗く、目の前には地面に埋められた大樽があった。樽には蓋がしてあって中は見えなかったが、チャプン、チャプンと水の跳ねる音がした。樽の横には髭の長い老人が座っていて、二人に見物料を要求した。
「見てからだ」
洲全は抵抗したが、老人はあくまで前払いを主張し、結局ウォーレスが二人分を支払うことで和解をみた。金をもらった老人は不意に笑みを浮かべてもぐもぐ何か喋った。
「え?」
ウォーレスは問い返したが、老人は構わず勝手に喋っている。よく聞いてみると定番の口上だった。
「北欧の伝説セイレーンは　オデュセウスを歌で惑わし……」
老人は奇妙な節回しの広東語で唸っている。その口上がいつまで経っても終わらないので洲全は痺れを切らした。
「おい親父、そんな口上はどうでもいいからとっとと見せろ」
老人は不満げに謡いをやめて蓋に手をかけた。
ウォーレスは緊張した。
「よござんすか?」
そう言って老人は蓋を開いた。油の浮いた黒い水面がゆらゆらと揺れていた。
「さ、もうちょっと傍に寄って」
「危なくないのか?」
「大丈夫。人魚は歌い出してからが危ない。聴いたら命はない。でもこの人魚は咽喉を潰してあるから歌は歌えない。大丈夫、大丈夫」

ウォーレスと洲全はその中を覗き込んだ。
樽の中にはまるで山椒魚のようにとぐろを巻く生物がいた。上から見た様子では魚にも両生類にも、或いは海獣の類のようにも見えたが、その癖両腕が妙に長い。頭には黒々とした髪の毛が生えている。
「本物か？」
洲全は思わずウォーレスの袖を引いた。しかしウォーレスにもすぐにはわからなかった。ただし蛇女のようなもの、あの人間が化けているような代物でないことだけは確かだった。ひょっとすると魚の皮膚に人間の両腕を繋いだものかも知れない。子供の腕を切り落として魚に括りつけるぐらいのことはやりかねない連中である。
「だとすればよほどの名医による外科手術だな」
洲全が耳打ちした。
何しろその人間のものとおぼしき両の腕は、ゆっくりではあるが確かに自分の意思で動いていた。かかる手術が医学的に不可能であることはウォーレスにもひと目でわかった。
――だとすればこの生物は何だ？
もう少し見たくて樽の中を覗き込もうとしたウォーレスを老人の杖が阻んだ。ふりかえると老人は少し離れてくれと言い、水の中に自分の杖を差し込んだ。そして魚の身体に沿ってぐるりと回すと、魚も杖に沿ってその身をぐるりと回転させた。一瞬だったが二人の目にはっきりとその顔が見えた。
ウォーレスと洲全の身体がその場で凍りついてしまった。
「ほ、本物か？」
洲全がウォーレスの袖を強く握り締めたまま言った。ウォーレスはまだ頷くわけにはいかなかった。しかし確かに魚の顔は人間の、しかも女性のそれだった。
「もうおしまいだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com